

岐阜県川辺町の企業経営者らで組織する「川辺いぎょうの会」は、3年前に地域振興を目的として発足、現在26社が参加している。

佐伯総合建設(本社岐阜県川辺町、電話0574・53・2555)の佐伯敏充社長が、企業として何か地域貢献できないかと「地域貢献事業部」を立ち上げたことがきっかけで設立された。さまざまな模索をする中で地域の経済人が集まり、資金・実働の両面を通じて地域活性化を行う組織として、2013年に設立。その後、川辺町で盛んなボートを地域振興の柱にすることを目的として、情報発信する拠点「かわべポートコミュニティ」を、川辺の歴史を発掘して観光資源として活用するための郷土史研究の組織「川辺学研究会」を、それぞれ立ち上げた。

かわべポートコミュニティは、飛騨川がボート競技のメッカであることから、ボートについての情報発信

「川辺いぎょうの会」地域振興に一役

ボート、郷土史を観光資源に

や研修、競技合宿などにも対応できる組織を目指している。現在、ボート競技についての基本的な知識をマニュアル化する作業や、競技のトレーニングについての研修、子どもたち

連載で紹介している。川辺は古来から木材の筏(いかだ)場として栄えており、江戸時代には将軍家に献上する米を生産してきた歴史を持つ。禅宗が栄えた

ちにボートに興味を持ってもらうための講習会などを実施している。また、岐阜大学ボート部が同施設を活動拠点として利用しているほか、昨年にはトヨタ自動車ボート部も合宿に利用するなど知名度も徐々に上がっている。川辺を「ボート王国」としてさらに情報発信と啓蒙活動を進めていく。

また、川辺学研究会は、地元の郷土史家や教員、僧侶で構成。川辺は、木材の流通で重要な拠点として古くから栄えてきたが、「地域の歴史を残す資料は驚くほど少ない」ことから、地域の歴史を調査し月に1回の



かわべポートコミュニティ外観

町内には多数の寺が点在、登山やボート競技の練習にも適した山も多い。こうした観光資源を発掘し、活用するための道筋をつけていくことが今後の課題だ。

こうした活動を資金面で支えるとともに、観光資源をどのように生かしていくか、会合を通じて議論を深めている。15年12月、こうして得られた知見を踏まえ、川辺町商工会他の団体と川辺町の将来像の提言と言える「かわべ近未来マップ提言書」を作成した。

かわべ近未来マップ作成後、町民とのオープンミーティングを開催したところ大きな反響があり、町民の声を聞く場として第2回のオープンミーティングをこのほど開催。約40人が参加し、川辺町の未来像についての希望や意見が活発に交わされた。今後もこうした意見交換を通じ、町民を巻き込んだ「自分たちの町をどうするか」の議論を深めていく。